

平びらびら伝

其の四

生き返りましたの巻



金井哲夫

地獄の鬼からのボーナスで、小物武士数名と家老とともにこの世に生き返えり、小さいながら城を構えて暮らせることになった「鎧」たち。今の時代がいつなのかよくわからないが、戦国時代ではなさそうだ。とは言え、鎧を着て馬に乗って外へ出ても、とりわけ注目されるわけでもなく、尊敬されるわけでもなく、石を投げつけられるようななく、いたって普通である。町並みは、見たことあるようなないような。昔と違うような違わないような。自分はこの町の領主なのかなんなのかわからないが、一応城主として認められてはいるようだ。

そんな、よくわからない時代のわからない場所で、生き返ってもやはり、前と同様、家老と退屈な日々を送っていた。

小さな城の小さな天守閣。その最上部が殿の部屋になっている。四畳半ほどの狭い座敷の四方が障子戸になっており、その外側に廻縁高欄（ベランダみたいなの）が取り囲んでいる。



殿は座敷に座り、窓の外を流れる白い雲を眺め、そよそよと吹き抜ける初夏の風を体に受けて、生きていることを実感していた。ごく小さな城ではあったが、小高い丘の上に建っているので、そこそこに眺望がよい。

周囲はちよつとした公園のようになっており、一方には城下町が広がっている。中でも大きな建物が集中しているあたりは駅前地の繁華街だ。川を挟んでその向こうにまた街があり、大きな建物が集まる駅前地区がある。こちらとあちらの駅前地区を縫って鉄路が横たわり、午後の日差しを反射して細く輝いている。

あちらの街にも、同じように小高い丘がいくつかあり、二つ三つ重なった向こうに、同じような城が建っている。しかし、それが誰の城かは家臣に聞いても知る者がいない。殿にはそれがちよつと気になっていた。

「家老よ」

畳の上にあぐらをかき、窓の外を見ながら殿は家老を呼んだ。

「はっ、殿」

狭い部屋なので、すぐ近くで家老が返事をする。

「あれ、誰の城かのう」

「それがしも、殿と同じときにここへ突然やってきたものですから、とんと知識がありません」



「隣が誰か知らないってのもアレだし、隣に引越してきた挨拶もいるだろうしね」
「そうですね」

天守閣のすぐ下に広がる新緑を撫でるように渡ってきた風が、開け放った天守閣の部屋をびゆるびゆると通り抜ける。遠くでブーンと軽飛行機が飛ぶ音がする。

「誰だろう」

「さあ」

川にかかる鉄橋の上を針金のような電車が通過する。カタンコトンと乾いた音が、ときおり風に乗って聞こえてくる。

「あのさあ……」

「はい？」

「やっぱり、引越しのご挨拶に行ったほうがいいよね」

「そりゃ、タオルかなんか持って行ったほ

うがよろしいですな」

「だよね」

「ええ」

窓の下では、城内を公園がわりにして遊んで走り回っている子供たちの甲高い笑い声が響いてくる。

「でもさ」

「はい」

「どうやって自己紹介しよう」

「どうやってって、隣の城に引越してきた何の何平ですって、言うんでしょ？」

「だーから、名前が思い出せないんじゃないんじゃん」

「あ、あそーでした。殿の名前だあ。そうそう」と家老は膝を叩く。

「それからさ……」

殿はごろりと寝転がり、仰向けになって天井を見上げながら言った。

「へえ」

家老は俯いて、紙になにやら書き付けながら生返事をした。

「ワシの鎧だけどさあ。兜の鍬形が取れちゃったでしょ。ナス野郎のせいで」

「ああ、そうですね。兜もあれがないとマヌケですな」

家老は顔を上げずに答えた。

「あれも直さないよ、恥ずかしいでしょ。ご挨拶に行くときに」

「そうですね」と、家老はひたすら何かを書き付けている。

どこかで山鳩が鳴いている。

「名前、どうしようかなー。長いのがいいよね、せっかくだから。なんとかの後胤、なになにのセガレのそのまたセガレの嫁の従兄弟のセガレのオヤジの隣のなんたらの……みたいな……」

「えー、こんなのはどうでしょう」と家老はやつと顔を上げ、何かを書き付けていた紙を高々と掲げた。

「古今東西のめでたい言葉を並べてみました。じゅげむじゅげむごこうのすりきり……」

「なんだそりゃ？」と殿はもうひとつといった様子。

「お経みたいで意味がわからないじゃないか」

「意味なんていいんですよ。長けりゃ」

「だけど、出だしのインパクトに欠けるなあ」

「そうですかあ？」

家老は再びうつむき、紙に何かを書き付ける。

「あ、これはどうでしょうね。死に神を追い払う呪文です。こうして現世に生まれ変わったのですから、もう二度と死なないようにと。いいじゃないですか」
「どんなんだ？」

「えー……」と家老は紙を持った手を前方に伸ばし、背筋をまっすぐにした。

「アジャラカモクレン」

「おお、異国語のようでかつこいいな」

「アジャラカモクレン……」

「それだけか？」

「このあとに時事的な言葉を挟む決まりなのでござるよ。何にしようかなあ」

「武家社会なんてどうだ？」

「おお、タイムリーでござるね。それにしましょ。では……」と再び寺子屋の子供のような姿勢になり続けた。

「アジャラカモクレン、ブケシヤカイ、テケレッツツノパ！」

「調子がいいね。手拍子を入れたくなる」と殿は肘枕で答えた。

「よろしいんじゃないやありませんか？ それもまた乙です。アジャラカモクレン・ブケシヤカイ・テケレッツツノパ！ ぽんぽん！」と

「いいねいいね。そのあとにジュゲムジュゲムを、手拍子を交えてつなげよう」

殿は喜んで起き上がった。

「おお、よろしゅうございますな。景気がいい。して最後にタイラの……、ここが問題でござる。最後に本当の名前を言わなければならんでござるよ」

「いやいや、そうじゃない。これ全部がワシの本名なのだ。他の連中は本名の前にあれこれ飾りを付けているだけだが、ワシの場合は本名だ。だから、タイラのアジャラカモクレン・ブケシャカイ・テケレッツツノパ！ ぼんぼん！ じゅげむじゅげむ……となる」

「こいつは画期的でござる」

こういう奇抜な発想は殿には叶わないと、家老は思ったが、半分だけ「バカなのかも」とも思った。

名前が決まったことに満足して、アジャラカモクレン……（以下やっぱり殿）はまた畳の上にごろんと横になった。

しばらくさわやかな風に当たり、外で走り回る子供たちの歓声を聞いているうちに、だんだん眠くなってきた。少し顔を動かして家老を見ると、すでに座ったままこっくりこっくりと船を漕いでいた。

気持ちがいい。生きて畳の上に寝転がるのは本当に気持ちがいい。

すると、横になった殿の顔の目の前に、畳からぬつとウサギの顔が現れた。

狭い畳部屋の一角に階段穴が切っており、ハシゴのように急な階段があるので、上ってくる人の頭が、いきなり畳から生えてくるように見える。寝転がっていると、そこから家臣の頭が出てきては「とのお？」と声を掛けられることがよくあるので普段は驚かないが、ウサギが出てきたのにはちよつとビックリした。

ウサギはしばらく殿の顔をじっと見ていたが、やがて「きゃきゃつ」と笑って階段穴から飛び出した。四、五歳の女の子だ。プラスチックでできたピンク色のウサギのお面をかぶっている。

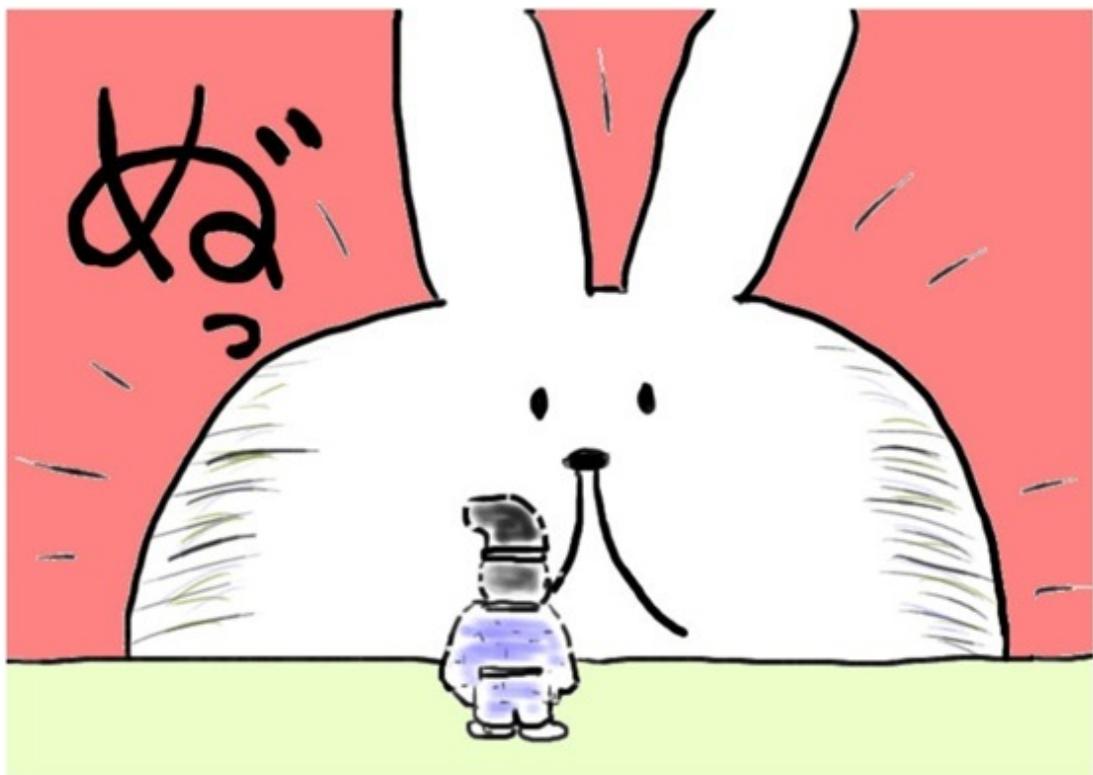
殿はむっくりと起き上がり、あぐらをかいだ。

女の子は殿の前に突っ立っている。殿は何と声をかけてよいかわからず、黙って女の子を見ていた。すると女の子は、殿を指さして言った。

「バカ殿！」

「なんだと？」

殿が立ち上がると、女の子は「バカ殿、バカ殿！」と





言いながら座敷の中を走り回りだした。

「こら、待て！」

殿が追いかけると、女の子は喜んで逃げ回る。ウサギの面を付けた女の子がぴよんぴよん逃げ回る様はかわいらしく、バカ殿などと呼ばれれば普段ならブチ切れて汚い言葉を吐くところだが、さすがに怒る気にもなれない。むしろ退屈していた殿は、小さなお客さんとの追いかけて楽しむ。

女の子は部屋の中に飾ってあった殿の鎧を見て、「こわいおにんぎょー！」と言った。

「これは鎧じゃ。怖くはない」と殿はやさしく答えた。

「おかおがこわいから、これあげる」と女の子がウサギのお面をとり、鎧に手渡そう

としたが、手が届かない。殿はそれを受け取り、女の子のかわりに兜の上にかぶせてやった。

ウサギのピンクの耳が、ちょうど兜の鍬形のように見える。それがときどき風になびいてピラピラと揺れる。

再び女の子は走り始めた。殿もそれを追いかける。この騒ぎに目を覚ました家老は、あたりをきよろきよろするやら、ヨダレを袖で拭くやら、何が起きたのか把握できず、座ったまま畳の上に手をつけてその場をクルクルと回った。

これを見て女の子はさらに喜び、廻縁をパタパタと走り回る。すっかり遊びモードに入った殿も、「どこじゃどこじゃ」とおどけて追いかけて回す。

しかし、はたと気がつくとな女の子がいない。殿は立ち止まって周囲を見回すが、どこにもいない。そのとき、家老が「にゃーっ！」と大声をあげた。

廻縁を囲む高欄の角に設えられた擬宝珠（タマネギみたいなやつ）の上に立っていたのだ。

「こ、これ、そんなところに登ってはいかん！」と家老が慌てて近づこうとすると、女の子は喜んで擬宝珠の上でぴよんぴよんと跳ねる。そして案の定、足を滑らせて屋根の上に転がり落ちてしまった。女の子は屋根の縁に辛うじてつかまり、ぶら下がった状態になってしまった。

「わ、わ、わー！ そのまま！ 動いちゃダメよ！ そのまま！」

狼狽して半分腰が抜けた家老を押しつけて殿が高欄を跳び越えようとしたが、家老はその着物の裾を掴んで制止した。

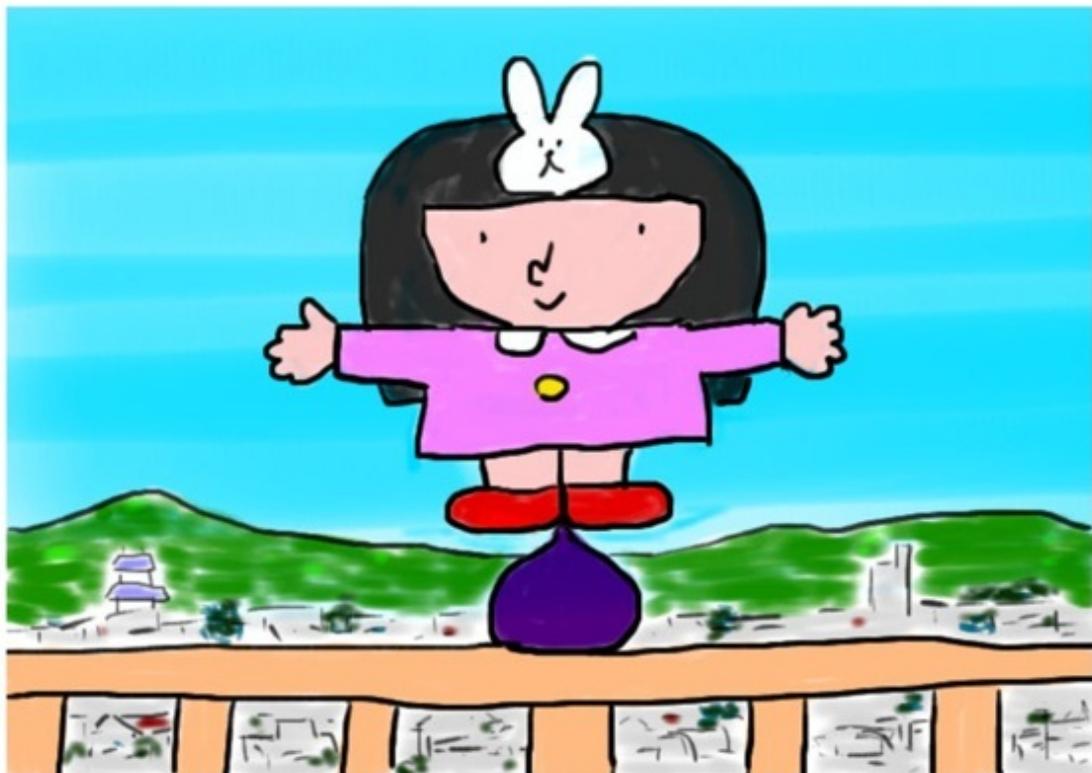
「いけません！ 殿が落ちたら、また亡霊に逆戻りですよ。ここはそれがしが！」

「バカ、離せ！ 早くしないと！」

殿は家老を振り切り高欄を跳び越えた。と思ったら、足を引っ掛けてつんのめり、屋根瓦の上にべたんと叩き付けられた。勢い余って、そのまま女の子に向かって頭から屋根を滑り降りる。女の子は咄嗟に殿に飛びつこうとして屋根から両手を離す。

そのまま落下していく二人。

さほど高くはない天守閣だが、まともに落ちればひとつたまりもない。殿は地面に背中から落ちた。その胸には、しっかりと女の子が抱かれている。殿の小太りのふよふ



よ体型が幸いして、女の子には傷ひとつなく、すぐに立ち上がると、騒ぎを聞きつけて駆けつけてきた母親の胸に飛び込んだ。

家臣たちもそれを取り囲み、よかったよかったと肩を叩き合う。遅れて、どたどたと下りてきた家老も、女の子の無事を確認すると、安心して地面に座り込んだ。

女の子を抱きかかえた母親は、家臣たちに「ありがとうございます」と涙声で礼を言いながらその場を立ち去り、家臣たちも、腰の抜けた家老を助け起こして、やれやれと城に戻っていった。

みんなが帰ってしまい、殿はひとり地面に横たわっていた。

「意外に早かったな。もっと娑婆を楽しんでくると思ったがな」と頭の上で声がした。

そこには、白髪のもじやもじや頭に薄汚れた灰色の一重の着物をまとった貧相な老人が立っていた。

「誰だ？」

「死神だ。お前を迎えにきた」

「やれやれ、また亡霊生活に逆戻りか」と殿は起き上がった。振り返ると自分の

体はまだそこに横たわっている。奇妙なもんだ。

「このまますぐに連れて帰りたいが、お前は今女の子の命を救った。そういう場合は、死者の権利として生き返りのチャンスが与えられることになっている。ワシとしてはそんな決まりは早く撤廃してもらいたいのだがね。本当に生き返られては、こっちも商売あがったりだ。もつとも、生き返れる確率はうんと低いがね。やってみるか？」

「このまま行くのもつまらん。文字通り冥土の土産にやってみよう」

「やれやれ、めんどくせー。じゃあ、こっちへ来い。さっさと済ませるんだ」

死神が歩き出すと、すぐ目の前に陰気な洞窟の入口が現れた。こんなところに岩山なぞあったのかと殿は思ったが、あの世のことだから何でもありだ。

「さあ、入れ」と死神にせかされて洞窟に入ると、あたり一面、見渡すかぎりロウソクの炎が燃えている。

「こ、これは！」



「お前ら人間の命だよ。ロウソクの長さが寿命ってやつだ。短くなつて燃え尽きると死ぬ」

「炎の勢いもそれぞれだな。このテキトーな長さでテキトーに燃えているのは……家老か！」

「そういうのは、なかなかしぶとい」

「これはまた、長くてきれいだな」

「そりゃ、さっきお前が助けた女の子だよ」

「おお、ワシのお陰で助かったのだな」

「や、もともと元気だから、お前が助けなくても奇跡的に傷ひとつ負わずに助かったはずだ」

「じゃあ、ワシは無駄死にか？」

「まあな。だが、助けようとしたお気持ちだけいただきますつて感じた。さ、さつさと済ませよう。そこに今にも消えそうな短いロウソクがある。それがお前だ。で、ここに新しい特大のロウソクがある。このロウソクに、あの火を移すことができれば、こっちがお前の新しい寿命になる。簡単だろ？」



死神はひときわ大きくて太い口ウソクを取り出して、殿に見せつけた。

「おお、そりゃいい話だ。やろうやろう。口ウソクをくれ」

と殿が手を出すと、死神は慌てて口ウソクを引っ込めた。

「おっとっと、ただし条件がある。この通路のずっと向こうから馬を走らせて、馬の上から口ウソクに火を移すのだ。しかも左手で」

「そりゃ無茶だ！ 馬が起こす風で確実に消えてしまう」

「じゃあ、権利放棄ということで、このまま行こう」

「別に構わん。もともと亡霊だ。娑婆に未練はない」

「え、そう言われちゃうとなあ。死神としては張り合いがない」

「もういいよ、めんどくさいから、早く行こう」

「ま、待てよ。そんなヤツは初めてだ。一度ぐらいやっていけよ。面白いぞ」

「娑婆に未練はないんだよ」

とそのとき、遠くから人の声が聞こえてきた。

「どのー！」と家臣たちが呼んでいる。

「バカどのー！」と女の子の声もする。

すると殿は、あの優しい日差しやさわやかな風、畳に寝転がる感触が甦った。女の子の笑顔。城の庭でバーベキューを楽しむ家臣たちの生き生きとした表情。

居眠りをする家老の平和な後ろ姿。生きているからこそ味わえる、そんな平凡な日常の光景が、急に愛おしく懐かしく感じられた。

「やっと気がついたか。倒れたお前の周りに人々が集まって、別れを惜しんでいるぞ。そうこなくちゃな。お前は後ろ髪を引かれる。ああ、やっぱり死にたくない」と

「馬じゃないとダメか？」

「ダメ」

「ロバでは？」

「馬だ。とびつきり足の速い名馬だ」

「わかった。やってみよう」

「よしよし。ではルールを教える。あっちの通路の奥から馬で思いっきり走ってくる。馬を走らせながら、お前はハッピーバースデーの歌を歌う。最後の、ハッピーバースデーチューユーでちょうどここへ来る。そして左手に持った口ウソクをびゅんと勢いよく振り回して炎を移すと同時に、ふっと火を吹き消す」



「吹き消すのかよ！ 消さなきゃダメって、矛盾してるじゃないか」

「ワシが吹き消しては決まりに反するから、お前が消すのだ。矛盾はない」

「というより、やったことがあるヤツがいるってのが驚きだ」

「ほれ、早くやろうよ。どうせ消えることになってるんだ」

こんなやりとりしている間も、家臣や女の子の声がより大きく聞こえてくる。

「みんな待ってるぞ」と死神は意地悪そうに言う。

「あと3分で時間切れだぞ」

殿の戻りたい気持ちが大きくなる。よし、ダメでもともと。一発やってみるか。

「わかった、やるからロウソクをよこせ」と殿は死神に伝え、立派な新しいロウソクを手に入れた。

「それでいい。このロウソクは、なかなか火付きが悪くて困るんだが、頑張ってくれたまえ」と死神。

そのとき、遠くから家老の声も聞こえてきた。

「どのー！ 殿の焼きそばをまた食べさせてくださーい！ せっかく名前を考えたんですから、戻ってきてくださーい！」

「もっとマシなことが言えないのか、家老は」と殿は思いつつも、ちよつと嬉しかった。続けて、家老の声が響く。



「とのー！ タイラのアジャラカモクレン・ブケシヤカイ・テケレツツノパー！ ぽんぽん！」

すると、それを聞いた死神の表情がさらに青くなった。

「お前、どこでその呪文を……」と言いかけて消えてしまった。

死神払いの呪文が効いた。殿は、しばらく周囲を見回し、誰もいないことを確かめると、ゆっくりと自分の炎を新しいロウソクに移し、どんと据え付けた。ついでに、その台の下の引き出しにあった同様の特大ロウソクを何本か取り出し、家老や家臣のロウソクもすげ替えてやった。特大ロウソクの炎は他のものよりも大きく勢いがあった。これでよし。

次の瞬間、気がつくと殿は城の庭に横た

わっていた。柔らかい草の感触が背中に伝わる。暖かい午後の日差し。自分を覗き込む家老、家臣たち、女の子、ついでに近所の野次馬たちの顔。戻ってきた。

城の庭に紅白の垂れ幕が張り巡らされ、一角にはバーベキューコンロが並び、炭火の煙が立ちこめる。近所の人たちも招待して、殿の生き返り記念パーティーが開かれた。命を捨てて女の子を助け、死んだかと思ったら甦ったという殿の噂は町内に知れ渡り、一気に町の人気者になってしまった。

「えー、みなのお衆。乾杯をするまえに、本日は重大なお知らせがござる。我らが殿の正式名称の発表でござる」

パチパチとまばらな拍手。みなビールのコップと紙皿を持っているので拍手ができないのだ。

「殿、壇上へ」

と家老に言われて壇に立つ殿。立派な鎧を着ている。兜には、あの女の子がくれたピンクのウサギの面からとった耳が鍬形として設えられていた。

「あー！ うさぎー！」と女の子は殿の兜を指さして喜んだ。

「では、殿、お名前をどうぞ」

「おっほん。ただいま紹介にあずかりました、当城の城主であります。本日はそ



れがしの正式名称を発表するでござる」

ポフポフと紙皿を持った手の甲で拍手をする音が響く。

「我の名は、タイラの……」

と言いかけたときに、一陣の風が庭を通り抜けた。殿の兜のウサギの耳がピラピラピラと音を立て、声がかき消される。

「ああ、やり直し。我の名は、タイラの……」

また風が吹き、ピラピラピラと鳴る。

「タイラのピラピラ！」と女の子の声が庭に響き渡る。

そしてどつと歓声が沸き、拍手が鳴り響いた。

そんなわけで、平アジャラカモクレン・ブケシヤカイ・テケレッツツノパ！ ぼんぼん！ じゅげむじゅげむ五劫のすり切れ……（中略）……長助は、平ぴらぴらとして親しまれるようになりましたとき。ちなみに、漢字で書くと「平平平」とじつにわかりやすくなっております。

めでたしめでたし。

平びらびら伝 生き返りましたの巻

<http://p.booklog.jp/book/65254>

文豪堂

著者：金井哲夫

絵：中川善史

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

文豪堂書店ブログ：<http://bungoudou.blog.fc2.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65254>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65254>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ